

「男、突っ走る！」

第98回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (24)	『オフィスツリーイン』代表
木内 真保 (51)	雅也の母
高倉 直久 (83)	真保の父、雅也の祖父
高倉 文代 (78)	真保の母、雅也の祖母
高倉 梢 (53)	真保の姉、雅也の伯母
山辺 一磨 (24)	中央高校3年2組生徒
眞榮田 浩平 (24)	名古屋芸術専門学校同級生
植野 雪奈 (24)	名古屋芸術専門学校同級生
船倉 篤志 (24)	名古屋芸術専門学校同級生 (声)
国枝 佐代子 (59)	『スリジェネ』総合プロデューサー
国枝 茉奈 (27)	佐代子の娘
大島 幸次 (53)	広告制作会社社長
山森 直海 (19)	『スリジェネ』メンバー
弘田 洗作 (23)	ミュージカル出演者
山川 裕作 (20)	ミュージカル出演者
神尾 勇 (61)	市長

1 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也がパソコンで仕事をしている――

と、スマホに通知が来る。

雅也「（画面を見て）ん……？」

篤志からLINEのメッセージが届いている。

篤志の声「うっちー、グランピング行かな

い？」

返信をする雅也。

雅也の声「グランピングって何？」

と、篤志から返信が来る。

篤志の声「荷物の準備を最低限にしてできる、

おしゃれなキャンプみたいなものだよ」

と、写真も送られてくる。

篤志の声「こんな感じのやつ」

雅也「グランピングか……」

2 立ち飲み居酒屋

雅也と雪奈が飲んでいる。

雅也「何だ、あのグランピングの話、ゆきち

ゃんが言い出したんだ」

雪奈「そう。そしたら、あつぽんが幹事やって言ってくれてね。ちようど琵琶湖に、良い感じのグランピング施設があるんだって。あつぽんが教えてくれたの」

雅也「そうだったんだ」

雪奈「うちーも行くでしょ？」

雅也「もちろん。実は恥ずかしい話、グランピングの意味知らなくてさ」

雪奈「ああ、確かにうちーそういう言葉弱そう」

雅也「だから、グランピング行こうってこの間、あつぽんから連絡もらったとき、『グランピングって何？』って返信しちゃってさ。そこで初めて覚えたんだよ、そういうものがあるってことを」

雪奈「思えば私たち、みんなで旅行したことがなかったもんね。良い機会になりそうな気がする」

雅也「学生時代はさ、幹事とか実行委員とかよくやってたのに、今やすっかりゆきちや

んやあつぽんに任せきりになっちゃって。

おんぶに抱っこで申し訳ない」

雪奈「良いよ。うちーだって忙しいんだもん」

雅也「忙しいのは、みんな一緒だって」

雪奈「楽しみだね、グランピング」

雅也「うん。十一月の下旬予定ってあつぽんからは教えてもらったけど」

雪奈「私、今大きい仕事抱えてて、それが終わるのが十一月上旬なの。だから、ひと段落した時期が良いと思ってね」

雅也「まあ俺も、十月末にミュージカルの本番があるから、それまではゆっくりできそうにないからね」

雪奈「今回は出るんだ、ミュージカル」

雅也「うん」

雪奈「頑張ってね」

雅也「ありがとう」

雪奈「もう一杯飲もう」

雅也「俺も飲もう」

N 「『神様が願うまで』の稽古と前後して、この頃は不思議と、友達と会う機会が重なっていました。この数日後には……」

### 3 カフェ

雅也と一磨がコーヒーを飲みながら話している。

雅也 「びっくりしたよ、かつちゃんも俺と同じ個人事業主になってるなんて。大学卒業してから、すぐ？」

一磨 「うん。だから、ちょうど一年半か」

雅也 「俺と同じような感じになってるとは知らなかったな」

一磨 「なかなか会うタイミングなかったもんね」

雅也 「いきなりさ、事業計画書の相談のL1 NEなんてしてきたから、何事かと思っちゃったよ」

一磨 「そうなるよね。木内にも、俺が部品設計の個人事業始めたこと伝えてなかったか

ら」

雅也「七月に康行に会った時は、何もかつちやんの話題出なかったから、知らなかったんだよ」

一磨「ああ、そういえば聞いたわ。確か、知り合いのためにキーボードを借りたって。

それに、木内が演劇を始めたことも」

雅也「そうそう。その時に、またタイミングが合えば、かつちゃんや良樹と四人で集まりたいって話したの」

一磨「まさか検定勉強とクラスのこととで手一杯のようにバタバタしてた木内が、演劇やってるって聞いたときは驚いたよ」

雅也「俺も、縁あって演劇の道に入るようになったけど、演劇をやったから、舞台の勝手がわかるようになった。これで、舞台の脚本も書けるようになる」

一磨「ひたすら書いてるんだ、今でも」

雅也「まあね。当時から、書くことしか知らなかった。けど、ここまでこれたのは応援

してくれるみんながいたから。何だか、こんな話していると、高校時代思い出すわ。よくみんなで検定勉強したり、いろいろやつたもんね。三年間クラスが同じだから、ほぼ毎日顔合わせてたしさ」

一磨「そうだよな。あれから四人揃って会うことも、ほとんどなかったもんね」

雅也「最後に四人揃ったのは、成人式の時になるか。この間、康行に会った時、四人で集まりたいねって話、してたところだったんだよ」

一磨「こうなったら、予定決めるか」

雅也「そうしようか」

一磨「俺と木内は何とか予定はつきやすいかもしれないけど、康行と良樹がどうなるかだね」

雅也「もうグループに送っちゃおうか」

一磨「そうだね、こういうのは早い方が良いから（とスマホを開いてメッセージを打

つ）」

雅也「楽しみだな、みんなが集まるの」

一磨「うん」

微笑む雅也。

N「こうして、グループLINEで相談の末、僕とかっちゃん、康行、良樹という高校時代の四人が集まることが決まり、日程は『神様が願うまで』の本番直前の十月中旬となりました」

#### 4 ファーストフード店

雅也が待っている。

N「不思議と人に会う機会はこれだけにとどまらず、かっちゃんと会って数日経ったある日には……」

と、ドアが開き、浩平が入ってくる。

浩平「悪い、待たせた」

雅也「ううん」

×

×

×

ハンバーガーやポテトを食べながら、

雅也と浩平が話している。

浩平「今日豊橋に仕事でさ、名古屋に戻る途中だったんだよ。それなら、うちーの地元の方にも行けると思ってさ。急に誘って悪かったな」

雅也「良いよ。今日に限って、夜の予定何もなかったの。最近、会議とか打ち合わせとかで夜もすぐ予定埋まっちゃうことがあったんだけどね」

浩平「演劇の方は、どうなんだよ」

雅也「来月末が本番」

浩平「すげえな。あのうちーが、とうとう舞台に出る側になるなんて」

雅也「友達という友達全員に同じこと言われてる」

浩平「専門のめんつとは、今でも会ってるのか？」

雅也「うん。あつぽんとか、ゆきちちゃんとか、おっくーとかあの辺のメンツとは、定期的が集まってるよ」

浩平「もうすっかり、絡まなくなっただな」

雅也「映像専攻のみんなは元気？」

浩平「大久保は相変わらず、あの感じで一緒にテレビ局で働いてる。東京組の三人も、何とかやってるみたいだぞ」

雅也「そっか。またみんなに会いたいわ」

浩平「懐かしいな、あの頃が」

雅也「ねえ」

浩平「どうした？」

雅也「ずっと、聞きたかったことがあるんだ  
けどさ……」

浩平「何だ？」

雅也「一年生の最初の時、廊下で俺に声を  
てくれたこと、覚えてる？」

浩平「ああ、何となく……」

雅也「あの時って、お互いに初めましてだっ  
たわけじゃん。どうしてあの時、俺に声か  
けてくれたの」

浩平「何でだったかな。多分、声かけやすか  
ったんだよ、うちーに対して」

雅也「え、そんな理由？」

浩平「うん、確かそうだった。話しやすそうだから、声かけてやろうと思ったんだよ」

雅也「そう……」

浩平「え、その確認したかったの？」

雅也「ずっと気になってたからさ」

浩平「そんなこと気にしてたんだ」

雅也「気にするよ、すぐく」

浩平「細かいところまで気にするところ、変わってねえな」

笑い合う雅也と浩平。

5 市役所・ロビー（数日後）

N「九月に入って間もなくのこと、僕たちは『神様が願うまで』のPRのため、市長への表敬訪問を行うことになりました」

雅也、佐代子、茉奈、洸、裕作が待っている。

佐代子「後は、直海だけね」

雅也「夜勤明けから、そのまま来るって言うてましたよ」

と、直海が入ってくる。

直海「おはようございます。すいません、遅くなつて」

裕作「おはよう」

洗「これで、全員揃いましたね」

茉奈「じゃあ、表敬訪問行きますか」

## 6 同・応接室

雅也、佐代子、茉奈、洗、裕作がソファーに座って待っている――カメラを持った新聞記者も準備をしている。

と、ノック音がし、職員を伴った市

長・神尾勇（61）が入ってくる――一同、起立する。

神尾「お待たせしました。ご苦勞様です」

佐代子「神尾市長、ご無沙汰しております」

神尾「やあ国枝さん、相変わらずのご活躍で。

まあ、皆さんおかけになって」

ソファーに座りなおす一同。

佐代子「本日は、観光協会委託事業、沖島友

さん原作市民ミュージカル『神様が願うまで』の表敬訪問に伺わせていただきました。（と直海を見ながら）今回主役を務める、

山森直海さんです」

直海「山森直海です。よろしくお願いします」

神尾「山森さんは、地元の方ですか？」

直海「はい。昨年まで、東高校の演劇部に所属してました」

神尾「東高校は、演劇部強いからね」

佐代子「今回は沖島友さん原作なので、やはり地元の人に主人公を演じてもらうのが良いと思いまして」

神尾「沖島友さんが、小説家として地元のことを題材にしてくださっているのは本当にありがたいことで、地域の魅力を全国に発信していただいている、言わば広告塔のような方です。本番には、ぜひご本人にも見てくださいですね」

佐代子「ぜひそうしていただけるように、観光協会さんから出版社経由でお願いをして

いるところです」

神尾「この地元でミュージカルの文化ができたのは、国枝さんの影響力のおかげです。それに、このように若い皆さんのパワーで、もっと地元を盛り上げていただけることを祈念したいと思います」

佐代子「ありがとうございます」

一同「ありがとうございます」

× × ×

雅也、佐代子、茉奈、洸、裕作、神尾が集まっている——新聞記者がカメラで集合写真を撮影する。

N「表敬訪問の様子は、地元新聞にも大きく出て、この後、広報にもナオのインタビューが掲載されるなど、『神様が願うまで』のプロモーション活動も本格的になりました」

## 7 同・階段く廊下

雅也、佐代子、茉奈、洸、裕作が階段

を降りてくる。

茉奈「皆さん、お疲れさまでした」

一同「お疲れさまでした」

洸「うちー、ほとんど喋らなかつたじゃん」

雅也「良いの。俺は運営として、対外的な業

務だから引率として出席しただけで。今日

のメインは、作品でもメインどころのナオ

や洸さんやゆーさくなんだから」

佐代子「うちーもすっかり、運営のプロね」

雅也「だてに、国枝さんのもとでやってませ

んよ」

裕作「でも、こうして運営の人がいるから、

俺たちが安心して稽古できるんですよ」

直海「あれ、今日は随分真面目じゃん」

裕作「失礼な」

と、大島が通りかかる。

佐代子「あら、大島さん」

大島「（気づいて）あれ、どうしたの？」

佐代子「『神様が願うまで』のPRで、表敬

訪問に」

大島「ああ、あの観光協会からの」

佐代子「そうです」

大島「（雅也に）あ、木内君。メールで送った件、頼むよ」

雅也「はい、来週ですよ。大丈夫です」

大島「急で悪かったな、よろしく（と去っていく）」

佐代子「うっちー、相変わらず大島さんから仕事もらってるんだ」

雅也「ええ。来週、企業の会報誌制作の取材のために、岐阜に行くことになって。その依頼も、大島さんからいただいています」

洸「岐阜まで行くんだ」

雅也「しかもね、ちょうどその企業さんの近くが、うちの母方の実家があるの。だから仕事終わりに、せっかくだからおじいちゃんやおばあちゃんに会ってこようと思って」

佐代子「そうしなさいよ。おじい様やおばあ様も喜ぶと思うわよ」

雅也「はい」

8 木内家・全景（朝）

9 同・居間

雅也と真保が朝食を食べている。

真保「今日、何時ぐらいに出るの？」

雅也「岐阜の工場に三時だから、余裕もって  
昼前にはこっち出る。二時間ぐらいは取材  
でかかるだろうから、まあ遅くても六時に  
は終わると思う」

真保「じゃあ六時過ぎに、雅が着く予定だつ  
て、伯母ちゃんに連絡しとくわ」

雅也「うん、よろしく」

10 高速道路を走る車

N「そして僕は、大島さんからの仕事の依頼  
で岐阜まで向かい、仕事終わりに久方ぶり  
に母方の実家を訪れました。僕が祖父母た  
ちに会うのは、高校三年生の冬、専門学校  
に入るための入学金の相談に行つて以来で

した」

11 高倉家・居間

台所で夕飯の支度をしている文代と梢  
——勝手口のドアが開き、雅也が入っ  
てくる。

雅也「こんばんは」

文代「雅」

梢「あら雅君、こんばんは。よう来たね」

雅也「初めて車で岐阜まで来たけど、結構距

離あるね」

梢「そうでしょ。高速使っても二時間半ぐら

いはかかるからね」

文代「お腹空いたでしょ、もうすぐご飯だからね」

雅也「やったね」

と、奥から直久が出てくる。

直久「おお、雅か」

雅也「おじいちゃん。豆腐屋畳んからどうしてるかと思ったけど、元気そうじゃん」

直久「草野球やってるからだよ」

雅也「（驚いて）おじいちゃん、野球やってるの？」

梢「家おつてもすることないからって、休日  
は近所のお友達と一緒にね。この間なんて、  
大会のために仙台まで行ったのよ」

文代「今時期は涼しいから良いけど、夏場な  
んて熱中症で倒れたらどうしようかと思っ  
て気が気じゃないのよ」

雅也「けどまあ、元気に体動かせるんなら良  
いんじゃない？ おじいちゃん、今年で八  
十三でしょ。八十越えて、重い病気一つせ  
ずに体動かせるんだから、大したもんじゃ  
ない」

直久「お前は、相変わらず書き物してるのか」  
雅也「そのために専門学校に行ったんでしょ。  
まあ今は、書く以外に表舞台に立つことも  
あるんだけどさ」

梢「久しぶりに雅が来たんだから、おじいさ  
んもそんな硬い話ばっかせんでも良いでし

よ。さ、ご飯にしよう」

×

×

×

食卓を囲んでいる雅也、直久、文代、

梢。

N 「久しぶりの母方の実家は、とても落ち着ける空間でした。一人で来たのは初めてでしたが、祖母や伯母の作ってくれた夕飯が美味しく、たまにはこういう時間も大事だと思いました」

12 中央交流センター・エントランス（翌週）

N 「翌週になり、『神様が願うまで』のリハ―サルを、本番と同じ中央交流センターのホールで行うことになりました」

雅也がトイレから出てくる――表から

佐代子が入ってくる。

雅也 「お疲れ様です」

佐代子 「ああ、うちーお疲れ。みんなは？」

雅也 「今、休憩中です。さっきまで、場面ごとの稽古と最終確認をして、休憩後にホ―

ルを使って、通し稽古になります」

佐代子「そう。多分今日のリハーサルでも、  
いろいろ改善点出てくるだろうね」

雅也「特に出はけの移動やダンスは、いつも  
の公民館の会議室とでは違いますからね。

実際の場で稽古して、気づくこともあるで  
しょう」

佐代子「そうね」

雅也「あの……国枝さん……（と呼び止め  
る）」

佐代子「どうしたの？」

雅也「実は……」

佐代子「……？」

雅也「『神様が願うまで』が終わったら、  
『スリジェネ』を卒業しようかと思ってま

す」

佐代子「……」

雅也「……」